

キリシタン神学の可能性

—『天地始之事』を巡って—

長谷川(間瀬) 恵美

キーワード：キリシタン・キリスト教・実生化(インカルチュレーション)・『天地始之事』

はじめに

筆者は、異文化におけるキリスト教の実生化(みしょうか・インカルチュレーション)を研究テーマの一つとしている。今回筆者は長崎の潜伏キリシタンが口頭伝承した聖書物語『天地始之事』(田北耕也校注「天地始之事」)を『桜美林論考人文研究第4号、5号』において現代語試訳として提出したことを通して、キリシタンの信仰が日本に実生化したキリスト教の一形態として神学・宗教学的に評価されるべきものと確信するにいたった¹。

『天地始之事』は、長崎の潜伏キリシタンの間で、彼らの生活・慣習と融合し、様々な変容の道をたどった。ポルトガル語の転用や原典(聖書)からの変容、また自由な解釈も加えられた。しかし、それでも『天地始之事』には彼らの隠れた信仰が思想として形成されており、日本の宗教的特性の一つの形を見出すことが可能である。

『天地始之事』は、思うに、日本のキリスト教史において民俗・民間伝承として民衆の間に根付いた「信仰の形」、つまり表象的テキストとしての役割を持つと言っても過言ではない²。そこで、日本人が歴史的・社会的・文化的な文脈において西洋キリスト教をどのように捉え、関係づけ、意味づけて、彼らの独自の神学を構築するに至ったかを、この『天地始之事』から考察する。

1. キリシタン研究の方法論

筆者が現在までに行ったカクレキリシタンの現地調査は、長崎生月の根獅子、西彼杵半島の外海、大阪の茨木の三カ所であるが、それぞれのグループには各々の特徴があり一概に「カクレキリシタン」と総称することはできないことを学んだ³。しかし、宮崎賢太郎氏(1950-)による、次のカクレキリシタンの定義には同意する。

カクレキリシタンとは、明治六年に禁教令が実質的に撤廃され、信仰の自由

が認められたにもかかわらず、カトリック教会とは明確に一線を画し、禁教下の潜伏時代を通して先祖代々受け継いできた信仰形態を今に伝えている人々をいう。その組織、運営形態は宮座、頭屋制に酷似し、オラショや行事など儀礼面では今でもある程度までキリシタンの要素を残しているが、370年余にわたる指導者不在によって教義的側面はほとんど忘却され、日本の諸宗教に普遍的にみられる重層信仰、祖先崇拜、現世利益的な性格を強く取り込み、キリスト教とは全く異なった日本の民俗信仰となっている⁴。

今回、外海の潜伏キリシタンが口承伝説として語り伝えた『天地始之事』を現代語に試訳する機会に恵まれたことにより、潜伏時代のキリシタン民衆が信仰したキリスト教についても理解を深めたいと考えた。カクレキリシタンが守り続けた先祖の教えの原点を確認することは、日本人が受容したキリスト教を理解することに繋がる。それは「キリスト教の実生化（みしょうか）」の一形態ではないかと、私は考えている。

数回の現地調査を通してキリシタンの辿った苦難の道を巡り、幸いなことにその際、キリシタンの子孫の語りにも耳を傾ける機会を与えられ、信仰者の体験や信仰内容、並びに価値観までも共有させていただいた。この得難い経験から、キリシタンの潜伏時代の信仰物語『天地始之事』が彼らの実体験に基づくものであることを理解することができた。

そこで今回は、長崎県西彼杵半島外海、五島地方だけから発見された『天地始之事』を教義書と位置付けて、神学的に分析することを第一の目的とする。その上で価値評価に立ち入らないことに気を配りつつ、そこに内在する信仰を分析し、その意味を解釈することを第二の目的とする。そして、文化の次元に根を下ろさない宗教は存続できないという説を踏まえて、外海キリシタンの現在を宗教と文化の両次元から総合的に考察することを第三の目的とする。

2. 『天地始之事』について

2.1 外海キリシタンの歴史概略⁵

外海地方の出津は大村純忠（すみただ 1522-1587）の領地に存続し、1570 頃カブラル神父（Francisco Cabral 1529-1609）一行によりキリスト教が布教され、藩主大村純忠が日本で初めてのキリシタン大名になったことから、キリシタンの歴史は始まる。純忠の息子、吉前（よしあき 1569-1616）は 1605 年に背教、その後死亡している。後を継いだ純頼（すみより 1592-1616）の時勢から外海地方はキリシタン迫害時代に入る。当時出津地方は、殿様はじめ住民のほとんどがキリスト教徒であった。出津地方は、長崎に比べて小藩の一部であり、交通の不便さが幸いして、厳しい迫害には遭わなかった。1629 年に 3 名の神父が殉教し、その翌年 1630 年から外海地方にも迫害がおこる。その後 250 年近く、キリシタンは隠れて信仰を守ることになる。

外海地方に伝わる「バスチャン様」とは、迫害期に人々の信仰の礎になるようにと、太陰暦によるキリシタン歴を伝えた日本人伝道師である⁶。彼が伝えた歴は「バスチャンの日繰り」として1634年より伝承され、人々はこれに基づいて祖先伝来のオラショ（祈り）、パウチズモ（洗礼）、結婚の秘跡、コンチリサン（痛悔）の祈りを唱えて儀礼化し、信仰の共同体を形成して団結した⁷。「バスチャンの日繰り」は、隠れて信仰を守る人々の結束を固める原動力として機能していた。また、殉教したバスチャンが伝えた以下の四つの預言を、潜伏キリシタンは後代に伝え続けた。

1. コンヘソーロ（聴罪司祭）が大きな黒船に乗って来ると、毎週でも告白をすることができる。
2. どこでもキリシタンの歌をうたって歩けるようになる（信仰の自由）。
3. 七代までわが子と見なすが、その後は救霊が難しくなる。
4. キリシタンが優位でゼンチョウ（異教者）が道をゆずる。

日本公教会再興の一大偉業とされる「キリシタンの復活」は1865年プチジャン神父（Bernard-Thodee Petitjean 1829-1884）が長崎大浦天主堂の聖母像の前で、240年間潜伏し続けた「潜伏キリシタン」との劇的な出会いを果たしたことに始まる。それから、プチジャン神父の宗教教育が開始された。プチジャン神父が外海の小浜海岸に上陸したのは、同年9月のことであり、夜中に30人程の出津の潜伏キリシタンたちがキリシタン古老バスチャン重三屋敷で出迎えた。当時、出津には200戸近くのキリシタンが存在していたという。この訪問は、結束していた潜伏キリシタンの人々を、改宗してカトリックになり「復活」する者と、「離れ」る者へと分断した。復活した者たちにはさらなる苦しみと拷問が待っていた。時はまだ、キリシタン禁制の時世だったからである。神父の到来に嬉々とした「神父派」はパライズに行く確信を得たかのように覚悟を決め、確固たる信仰を面に表明し、拷問され、各地に配流され、棄教を強いられた。出津に信仰の自由が訪れたのは1871年であった。

1879年に赴任したド・ロ神父（Marc Marie de Rotz 1840-1914）は出津教会の建築し、初代主任祭司となる。神父は、当時、極貧の中で子供の間引きが制度化していた外海の人々と苦悩をともにしていた。救助院におけるソーメンやパン作り、機織りをはじめ、農園の開拓、医療など、数々の福祉活動をおこなった。1890年、遂に信仰の自由を得る。この外海の地から2名の日本人枢機卿、数々の司祭、シスターが誕生し、世に送られた。外海は日本のカトリックのルーツと呼ばれる所以である（現在でも人口の半分がカトリック信者である）。

一方、プチジャン神父を信用せず、「離れ」たグループがカクレキリシタンのグループである。その理由の一つが「野中騒動」といわれるものである。それは、伝来秘蔵の聖ミカエルの絵⁸と十五玄義図の絵⁹を庄屋が持ち出し、奪い合いになった事件である。以後、

神父派と「離れ」のグループとの対立は深まっていく。和睦は何度か試みられたが、関係が修復されることはなかった。カクレキリシタン（離れ）がカトリックに復活しない理由はいくつか考えられている。

1. 野中騒動による「神父派」への不信感。
2. 今まで世話になった旦那寺（天福寺）に対する御義、故に寺離れしない。
3. 寺を離れても、教会には戻らない。
4. 先祖代々の教えの正統性を主張。

聖像は、潜伏キリシタンの人々が皆で隠し守ってきた宝物であり、それが盗まれたとなつては「靈魂の救い」に関わるというのが騒動の真意でもあった。代々、家を廻して隠し持ってきた聖像を勝手に持ち出されたということは、それまでの信頼関係が崩れたことを意味する。また、神父によって先祖が守り通した教えや洗礼の有効性を否定されることは、彼らの誇りが許さなかつたようでもある。問題となった二つの聖画は、その後出津教会に保存されたが、第二次世界大戦中の爆撃により破損された。現在はその複製が長崎市立博物館に収められている¹⁰。

2.2 歴史的背景・内容整理

歴史的背景

1865年、長崎県浦上の潜伏キリシタン、ドミンゴ又一は、一冊のキリスト教の教理本をプチジャン神父に手渡した。そこには約250年にわたる潜伏期間に長崎の潜伏キリシタンが口伝継承した神話、旧約・新約聖書物語が描かれてあり、表題には「天地始之事」と記されてあった。ところが後日、プチジャン神父と長崎教区の副司教サルモン神父は、これを「奇怪な伝説を交えた、取るに足らないもの」として処分してしまった。約一世紀後の1931年に、田北耕也氏は『天地始之事』を全部暗誦していた91歳の紋助爺と最後に会っている。そして氏は、西彼杵半島東檜山の下村善三郎氏が所持した写本『天地始之事（善本）』を底本とし、校注を加え、『キリシタン書・排耶書』の中に収録し、1970年に出版した¹¹。

外海・黒崎地方の潜伏キリシタン（隠れキリシタン）とその子孫たち（カクレキリシタン）が現代まで、伝え続けた貴重な伝承と理解した私は、これを2013～2014年に現代語試訳したことがきっかけとなり、再び彼らの信仰と向き合うこととなった。ちなみに言えば、潜伏キリシタンが継承したキリスト教は決して異端ではない¹²。それを立証するのが『天地始之事』である。日本のキリシタンが、現在に至るまでの約450年以上の月日をかけて紡いだキリスト教の歴史は、日本におけるキリスト教の実生化（みしょうか・インカルチュレーション）の一形態であり、そこにキリスト教の普遍的価値が再確認されるものと筆者は見ている。

内容整理

『天地始之事』は15の題目に分かれている。

- | | |
|-----------------------|--------------|
| (① 天地の始まり | (⑪ 信条 |
| (② 悪の実、中天に追いやられる | (⑫ 主の初救済 |
| (③ 神、人類救済のために分身を世に送る | (⑬ 主、役割を与える |
| (④ ルソン国の帝王の死 | (⑭ 黙示録 |
| (⑤ サンタマリアの受難 | (⑮ 追記 |
| (⑥ 朝五カ条の祈り | |
| (⑦ ヘロデ、国内を吟味する | |
| (⑧ 主、捕えられる | |
| (⑨ 主、連行される | |
| (⑩ 金に目がくらんだ盲人の話 | |

『天地始之事』は三部（旧約・新約・黙示録）構成の神話的世界観を展開している。聖書に述べられている記述に加え、伝承的に変形したものが混合する。中には、自己流に連想され解釈されたものや、ことばの誤った解釈もある¹³。

内容からは五部構成として考えられる¹⁴。第一部（①～②）は旧約聖書の「創世記」に記されている天地創造の物語、人間の創造、悪魔ルシフェルの悪たくみ、樂園追放、洪水伝承、悪が増大が物語られる。第二部（③～⑥）は新約聖書と民間伝承が混合する。サンタ丸や（マリア）の出生、求婚話、両親からの勘当、受胎告知、処女懐妊、エリザベト訪問、御子の誕生、三人の博士の訪問等、聖母マリアを中心とする物語りが繰り返される。第三部（⑦～⑩）では、御身（御子イエス）の生涯が中心となる。神殿のキリスト、幼児虐殺、ヘロデにより追われる母子、仏教徒（博士たち）と議論する少年時代、弟子の獲得、十ダツ（ユダ）の裏切りと自殺、ゲッセマニでの苦しみの祈り、逮捕、拷問、十字架への道、磔刑。第四部（⑪～⑭）は、復活・昇天（イエスと命名）、マリアの被昇天、世界の滅亡である。第二部から四部（③～⑭）は、聖母十五玄義図に順じて物語が進められている。そして第五部（⑮）は、後世に追加された物語（死者の訪問・煉獄の火による死）である。

『天地始之事』の原典や成立過程などは、ほとんど明らかにされていない。しかし、成立期は17世紀後半頃ということが先行研究によって明らかにされている¹⁵。

2.3 神学的省察

「神学」とは英語で Theology、その元であるラテン語では Theologia、つまり Theos（神）について語る Logo（ことば）である。その意味で「神学」とは、基本的に「神についてどのように語るか」という意味である。そこで、まず『天地始之事』を伝承した潜伏キリシタンが捉えた「神」を考察し、神の本質に関わる神秘としての「創造」「受肉・託身」

「贖罪の磔刑（十字架）」「復活」「三位一体」について考察する。次に、彼らが信じ、語り、守り継ぐことによって展開され、伝承された世界観を考察する。それは人間の「救い」に関わる諸々の神学的考察だからである。

2.3-1 信じるべきもの（教理）

『天地始之事』において、キリシタンが信じるべきものとして、キリスト教の核となる教理（「神デウス」「創造」「受肉・託身」「贖罪の磔刑（十字架）」「復活」「三位一体」）が物語られる。それぞれの教理がどのように解釈されて伝承されたか、またそれらの正統性について吟味する。

神デウス（題目の①）

『天地』（以下、『天地始之事』を『天地』と略す）において、神は「デウス」として語られる。田北耕也氏は『天地』にあらわれる用語の頻度について記し、一神教的性格が保持されていることを強調している。

全篇を通してデウスという言葉が四三回、デウスと同意の「おんあるじ」が二三回、計六六回。…これは神の支配が世界と人生とを一貫しているとい信仰の表現であり、多神教とも汎神論ともシンクレタイズしなかった証拠である¹⁶。

筆者は、キリシタンが「デウス」という宣教師が伝えた言葉の音をそのまま引き継いだことに、大切な意義を見出す。キリシタンは神道の「カミ」や仏教の「仏」、または神仏習合の「神仏」という言葉と区別して、あえて「デウス」という抽象的な名前を伝承した。しかしながら、この「デウス」は「天地の御主」「人間・万物の御親」「太陽のようなもの」として語られ、必ずしも超越的な絶対者としては把握されていない。『天地』においては、デウスと人間との関係は、多分に親密な親子関係である。デウスの留守中にルシフェル（悪魔・仏¹⁷）を拝してしまい、後悔する人間に対して、デウスは寛大にも人間の過ちを許す。しかし、その後、禁断の木の実を食べた人間は、パライソ（天）から地上へと追放されてしまう。デウスとの約束を裏切ったことを悔いて挽歌を唱える人間に対して、デウスは「後悔のオラショ（祈り）を400年続ければ、またパライソ（天）に戻そう」と仰せになる。このようなデウスの慈悲は、地上に追放されて飢えに苦しむ祈る人間にも注がれる。デウスは籾の種を与えて人間を飢餓から救うのである。

このように、『天地』で伝えられるデウス（神）は、裏切ろうとも悔い改め、懺悔する人間には徹底して救いの手を差し伸べる「寛大な神」として解釈されて、伝承されている。そこには、親子の関係、「呼応（call and response）の関係」が認められる。表面上は仏教徒の檀家として「仏」を排して隠れて生きのびることを余儀なくされた潜伏キリシタン

たちにとって、「許しの神」はどうしても必要であった¹⁸。ここに潜伏キリシタンの偽らざる心境が反映され、開示されて、伝承されたことの意義が認められる。

創造（題目の①）

『天地』において、デウスは「天地の造り主」として語られる。この語りは、現代のカトリックとプロテスタントが共に継承するキリスト教の「使徒信条」の第一節に相当する¹⁹。

潜伏時のキリシタンにとって告白すべき神は「天地の造り主」であった。初めに神デウスは12の天を創造する。そこには煉獄（リンボー）やエデンの園（コロテル）、極楽（パライソ）が含まれている²⁰。次にデウスは自らの「息」を吹き入れて人を創造し、七日目を安息日としたことが物語られている。その後、男と女（アダムとエワ）は悪魔ルシフェルにそそのかされて、禁断のマサンの実を食べてしまう²¹。デウスの命令に背いた人間はエデンの園から追放される。デウスは、血の涙を流して後悔して許しを請う人間に、400年の間、後悔を続けるのであれば、その時にパライソに戻そうと約束する。

人間は誕生の時から罪をもって生まれる。それは、人類の始祖の罪に由来する。アダムとエヴァは神に背いて罪を犯したが、罪を悔い改めることをしなかった。この「原罪」は、その後、数千年を経た後に、御子イエス・キリストの十字架による贖罪死によって贖われる。この原罪説とキリストの贖罪死は、キリスト教の「救済」の教理の中心的なテーマである²²。キリスト教信徒にとって、イエス・キリストがご自身を私たち人類のために贖いの代価として捧げて下さったことにより人間の罪は赦されているという信仰は「救済」の根拠であり、安心して救いの中に生きることができるといふ「希望」の根拠でもある²³。

ところが、『天地』で語られる創造神話には、罪を悔いるアダムとエヴァに対して、その子孫への救済は約束されているものの、「原罪」を御子の受肉や贖罪思想に関連付けられてはいない。キリシタンにとっては、先祖の犯した罪は自分達が懺悔しつづけることによって許されたのである。ということは、潜伏時代を生きたキリシタンは自分たちの罪を懺悔する姿とデウスに赦しを請う先祖の姿とを重ね合わせて伝承した、ということであろう。ここにキリシタン独自の救済の構造をうかがい知ることができる。

受肉・託身（題目の③）

『天地』では、「デウスとの約束を破ったことにより地上に追放された人間は、その後増え続け、ただ生まれては死んで地獄に落ちていった。デウスはこの悪循環を憐れみ、人間を救うために、自分の分身として御子を地上に送られた」と受肉・託身の思想は物語られている。

先に述べたように、神の自己分与（受肉・託身）物語においては、「人間の罪を贖うために御子を世に送る」というキリスト教の受肉思想は見られない。ここで物語られている神デウスは、人間を地獄に落とさず、ただひたすら救済しようとする「憐れみ深い御主」として解釈されている。

伝統的な神学の思想においては、イスラエルの神である「隠れた神」の自己啓示はイエスの「受肉」の出来事の特特殊性によって決定的とされる。「隠れた神」の本質は、まさに「受肉の出来事」において物語られるのである。こうして神の顕現をイエス・キリストに見ることが神の神性を真に認識することになるのである。この観点だけからすれば、キリシタンの伝える神の受肉・託身思想には重大な欠落があることになる。しかし、一方、著名なカトリックの研究者である稲垣良典(1928-)がトマス・アキナスの「神はなぜ人となったのか」という問いに対して「自己を他者に分与することが善の本質側面であり、したがって最高善である神に適合するのは最高の仕方であり自己を被造物に分与することである²⁴」と述べている内容から察すれば、キリシタンの伝える神の受肉・託身思想があながち間違った解釈であると断じることなかろうと思われる。

贖罪の磔刑(題目の⑦～⑩)

帝王ヨロウテツ(ヘロデ)はこの世に王が誕生したという知らせを聞き、自分の帝王としての地位を危ぶみ、4440人の幼子の命を絶つ。イエスは、数多くの幼子の命が絶たれたのは自分のせいだと考えて苦しみ、苦行をする。そのイエスのもとにデウスの声がかかる。それは、死んだ数万の幼子が天国に入れるように責め虐げられて、命を苦しめて死に臨むように、つまり「身代わりとなれ」という命令であった。そして、イエスは十ダツ(ユダ)の裏切りにより捉えられ、連行され、十字架に付けられて、盲人の手によって殺される。

外海地方では、極めて貧しい生活の中、子どもの「間引き」が暗黙の了解として制度化していた²⁵。自分の子どもを殺さねばならなかった親の苦悩、苦痛は量り知ることができない。自分が手をかけて死んだ子どもの身代わりとなってイエスが殺され、代わりに子どもは救われて天国にいると解釈することは、子どものみならず、彼ら自身の「救済」にも成りえた。イエスが救済者として子どもたちのために贖罪の死を遂げたという物語は、キリシタン庶民の間に説得力を以って「救済の物語」として語られ、そこではイエスは救済者として認められ、伝承されることになったものと思われる²⁶。

復活(題目の⑪)

「金曜日に御主は大地の底に下られて、土曜日まで大地の底にいらっしゃった。…三日目に御親デウスの右座られた」と『天地』において語られる。

キリスト教が世界宗教に成りえたのは、救世主イエスの復活の出来事を「信仰の真理」と信じられたからである。ドイツの神学者カール・バルトは、復活は信仰によってのみ知りえる神の啓示行為であると説く。この復活の出来事をキリシタンは誠実に伝承している。救世主イエスの復活の出来事を自分たちの来世の姿と重ね合わせ、永遠の命によみがえるという希望、つまりは救済と関連付けていた。

三位一体（題目⑪）

聖書によって啓示される神の教理は「三位一体」として提示される。三位一体の神は、神が実体において唯一でありつつ、父と子と聖霊の三つの位格（ペルソナ）において存在する、ということの意味する。この「三位一体の神」という考えは、『聖書』における神の啓示に対する信仰に基づいている。神の本質が「一」であること、その一なる神において三つのペルソナである御父、御子、聖霊が実在的に区別されるということ、が信仰告白の重要な内容となっているのである。

『天地』においてもデウスの位格（ペルソナ）は父と子と聖霊である。「御親デウスはパアテル（父）、御主はヒイリヨ（子）、御母はスヘルト・サント（聖霊）であるが、デウスは一体」と語られている。しかし、キリシタンは御母マリアを第三位の「聖霊」として崇敬する。そこで、聖母マリアが「聖霊」として三位一体の中に位置づけられることは、正統なキリスト教教義の観点からは疑問視されることになる。けれども、三位一体とは、根と木と実がそれぞれ三つであり同時に一つであると説明されるように、聖霊は決して文字どおりに聖母マリアではない。『天地』においてはマリアの存在がいかに重要であったかが、これによって十分にうかがい知ることが出来るであろう。聖母マリアと聖霊については後述する。

2.3-2 語るべきもの（神話・伝承）

潜伏キリシタンには、自らの信仰が神道とも仏教とも異なることを明らかにして、自らの信仰を子孫に継承させる必要があった。そのために、神話の形をとって語り伝えられた物語が『天地始之事』である。特に、そこで強調されたのが、1. 自分たちが住むこの場所が「地上のエデン」であるということ、2. この「地上のエデン」に「救い主」が誕生すること、3. 自分たちキリシタンは必ず天国に迎え入れられるという「救済の希望」を子孫に語り伝えること、であった。こうして『聖書物語』は、潜伏キリシタン自身の救済の希望の物語として形成され、彼らの信仰を保障する救済史として守られ、継承されたのである。

地上のエデン

『天地』は、デウスとの約束を破ったことで下界に追放された人間が降り立った場所がキリシタンの住む「黒崎の大地」と語る。つまり、キリシタンは自分たちの住む「黒崎」こそが、デウスから与えられた「世界郷土」として認識していたのである。これはキリシタンが創造の神秘（信仰によってのみ肯定される神秘）として伝承していたと解釈できる。この信仰ゆえに、自分たちの先祖とデウスとの約束は400年後に必ず果たされると信じて命を繋ぐことができた。つまり400年後には先祖の過ちは取り消され、極楽に入ることを許されると信じ、救済の希望が紡がれていたということである。バスチャンが残した預言の一つ、「400年、後悔を続ければパライソに戻れる」というデウスとの約束は、

デウスの愛が自分たちキリシタンに向けられている確信となって、救済史的に伝承されたのである。だからこそ、キリシタンは殉教ではなく、生き延びる道を選択してきたのだ、とも考えられる。キリシタンは「後生の助かり(来世の救済)」という希望の教えを伝承し、これを生きつづける糧(力)としてきたのである。

旧約聖書の「出エジプト記」に、エジプトから脱出したイスラエル民族が唯一神によってカナンの地を与えられるという土地取得の出来事が記されている。この物語は、神とイスラエル民族の約束事、神の自己証示として重大な意味を持つ。選民思想とは、自分たちこそが選ばれた民であるという信仰に基づく思想であるが、けっして特権階級として選ばれたことを誇る思想ではない。それは自分たちが神の永遠の計画と目的に従って導かれているという信仰に、救いの恩恵性と確かさを備え持つ、という思想である。

潜伏キリシタンも同様に、先祖たちが神の摂理を通して救われていると信じた²⁷。自らの生存する土地が選ばれた場所であり、自分たちは選ばれた民であると認識していた。この信仰のゆえにこそ、信じがたい苦難にも耐える力が発揮されたと考えられる。また、彼らの選民思想的な信仰は、信仰共同体を形成するための十分な根拠になりえたとも考えられる。

聖母マリア

『天地』の約三分の一(題目の③～⑥)は、丸や(マリア)についての物語である。これは、キリシタンの間で「聖母マリア」がいかに重要な人物として位置づけられていたかを示すものである。潜伏キリシタンは「びるぜん・丸や(処女マリア)」を信心深い信仰者の規範として、また「聖母マリア」を「母」という身近な存在として、そして「救世主」の母という崇拜の対象としても捉えていたことをうかがわせる。

丸や(以下マリア)は身分の低い娘で勉学に秀でており、天からのお告げに殉じて「処女の行」を積んでいたと物語られる。そこに、ルソン(フィリピン)の国の帝王(サンゼンゼジウス)が求婚に訪れるが、マリアはこれを断る。窮地に陥ったマリアに天から花車が降り立ち、六月暑中だというのに雪が降る中、花車に乗って天に逃れる。そこでマリアはデウスからのお告げにより「雪のサンタ・マリア」と祝される²⁸。地上に戻ったマリアは天女のごとく、天使ガブリエルのお告げにより、聖霊によって懐妊する。その場面は蝶がマリアの口に飛び込むことで御子を授かるという美しい描写で語られる。その後マリアは、叔母のエリザベス(洗礼者ヨハネの母)を訪問し、安倍川で出会う。胎内の子どもたちが踊り、彼等が後に完成したのがアヴェ・アリアの祈りであるとされる。

その後の展開は実にリアルである。マリアは未婚で懐胎したことによって両親から勘当され、苦難の旅に出る。そして一人旅の途中、二月中旬の大雪の降る日、ベルン(ベツレヘム)の牛小屋で御身様(イエス)を出産する。

『天地』において、マリアの処女性と母マリアを「聖母」として崇拜するローマカトリック教会の慣習は踏襲されている。しかしながら『天地』には、マリアが「神の母」(テオ

トコス)²⁹であるという神学の教理を把握する描写はない。どちらかという、後半になるにつれ、神の受肉・託身の教理はうすれ、イエス（御身様）は「神の子」、マリアは「子の母（クリストコス）」という立場で物語られる。デウスは、天からマリアやイエスを召し寄せたり、声を下したりしている。あたかも地上ではデウス、イエス、マリアは別々の位格であるが、昇天した後にマリアには取り次ぎの役、イエスにはデウスの助手という役が与えられて、デウスと一体化とされ、やがて三位一体の教義が形成されたという語りになっている。ここに聖霊とその働きによって身ごもったマリアの同化が認められる。

救済主イエス

長崎の潜伏キリシタンは「十五玄義図」を大切に守り続けてきた。これは、民衆のキリスト教教化の目的として描かれ、キリシタンはそれを絵解き物語（ロザリオの祈り）として継承した。五つずつ「喜び」「悲しみ」「栄光」の玄義が描かれている。「喜びの玄義図」には、受胎告知、聖母の訪問、イエス降誕、イエスの神殿奉獻、イエスの博士との議論までが描かれ、「悲しみの玄義図」には、イエスがゲッセマネの園で苦しみ祈る姿、イエスの鞭うち、荊冠、十字架の道、磔刑までが描かれている。この場面をキリシタンは「昼五カ条の受難の祈り」として継承した。「栄光の玄義図」には、イエスの復活、昇天、聖霊降臨、聖母の被昇天、聖母戴冠までが描かれている。この場面は、「夕五カ条の復活の祈り」として継承されている。キリシタンはこれらの場面を観想しつつ、朝昼晩に分けて祈っていた。救世主イエスについてもマリアと同様、十五玄義図にほぼ忠実に沿って伝承されてきた。

3. 『天地始之事』とキリスト教の実生化

3.1 実生化

実生化（みしょうか）とは、異文化の大地にまかれた種がその文化に特有な性格を備えて大地に根を張り、花を咲かせることである³⁰。ここではキリスト教が日本の大地に如何にして根付き、実を結び、開花したかという、神学で課題とされる「インカルチュレーション（inculturation）」について考察する。

『天地』を伝承した外海地方のキリシタン民衆は、この口承伝説テキストに彼ら独自の解釈を与えることによって神学を形成し、それに基づいた儀礼を育み、全てを自分たちの身近な経験として後世に伝えている。紙谷氏は、キリシタンの儀礼と神話の意義について以下のように語っている。

潜伏生活をおくるキリシタンにとっては、弾圧の危険を犯してもこの信仰を守る必要があるのか、また、彼らの行う儀礼は仏教徒の儀礼とは何故異なっているのかという疑問は絶えずキリシタンの前に存在した。キリシタン信仰

の存在意義を明らかなものとする神話が必要だった。…自分たちと周囲と異なる祭儀生活を明確に説明する神話こそ、生きる糧であった³¹。

だからこそ、潜伏時代のキリシタン民衆には、自分たちのための救済史物語として『天地』を自らの生活に関係づけ、意味づけて、伝承させなくてはならなかったのである。潜伏キリシタンの信仰は個人のものではありえず、常に集団のものとして守られた。彼らは常に「宗教集団」として生活し、「宗教的共同体」として生活した。信仰を同じくするキリシタン民衆は相互に依存し、相互扶助の協力関係を築いて、相互規制の社会関係を保持した。このように信仰が集団によって独自に持続、継承されたという点に、私はキリシタン信仰のローカルな意義があると考えている。以下において、潜伏時のキリシタン民衆がその宗教集団的な社会的生活において育んだ秘跡について考察する。

3.1-1 社会的集団の中で実践し、育まれたもの

信仰共同体

『天地』が伝承された長崎の外海地方、そして外海から移住した人々が住みついた五島列島において、キリシタンが潜伏しつつ信仰を保ち続けることは、宗教集団としてのコンフラリア（地下組織における共同体）の支えなしには不可能であったと考えられる³²。それは、潜伏時のキリシタンは「個人」で信仰を育てたのではなく、「信仰共同体」の中で、かつ「生活共同体の一員」として信仰を育てたに違いないと思われるからである³³。コンフラリアという信仰共同体は建物としての教会ではなく、精神的な教会として存在していた。また、この組織を支える拠り所となったのが『天地』である。小島氏は以下のように語る³⁴。

相次ぐ迫害に虐げられながら漸く逃げのびた孤島（五島諸島）で、彼らは何としても団結にたよるほかなかった。その中心となったのはエケレンジヤなる「教会」であり、またこの『天地始之事』であった。文章が物語体であるのも、教義として教えるためのものであるより、語り継いでいく気持ちが先立ったためであろう。

そこで、再度確認されることは、『天地』の物語に伝承されている救済観は信仰共同体の中で育まれた来世における救済信仰であり、かつ現世利益でもあるという、二つの救済観であったという点である。

洗礼（バプテスマ）（題目の⑤）

次に、生活共同体の中で実践され育まれたパウチズモ「洗礼」について取り上げる。カトリック教会は、目に見えない神の救いの恵みが、目に見えて確かなものになることを「秘

跡」として宣言した。七つの秘跡とは、洗礼（バプテスマ）、堅信、聖餐、告解、終油、叙階、結婚である³⁵。洗礼とは、イエス・キリストの救いを受けて新しく生まれ変わり、聖霊が与えられると信ずることであり、その際の儀式には「水」が用いられる。「水によるバプテスマ」とは、聖霊によるバプテスマが目に見える形として現臨することを表す。

『天地』において、特に強調されている「秘跡」の一つがパウチズモ（洗礼）である。キリシタンは、神デウスによって制定された救いへの道としてパウチズモ（洗礼）の秘跡を儀式として子孫に継承した。『天地』では、マリアとイエスがヘロデ大王からの追手から逃れて辿り着いたのが、パウチズモ（洗礼）の大川であると物語られる。そこで二人は、三ジュアン（聖ヨハネ）に出会う。三ジュアンから洗礼を授かったイエスは、悪人の来世の救済のために水を分け、「その川の裾で洗礼を授かったものは、皆パライソの快樂を受けることができるということ、これは真実である。」と宣言する。『天地』で語られるこの場面では、悪人であろうとも洗礼を授かる者には来世の救済が与えられるという救済の希望が説かれる。神デウスは悪人であろうとも来世の救済の道を示すという。いかにも浄土真宗の開祖、親鸞上人（1173-1263）の説く「悪人正機説」もどきである³⁶。しかし、ここには決定的なキリシタンとしての判断基準が伝承されている。パウチズモ、すなわち洗礼（バプテスマ）の儀式を授かることが救いへの道の前提とされていることである。

キリシタン弾圧時代に、生きのびるために仏教の檀家制度に組み込まれ、デウスを裏切っているという後ろめたさの中に生きていたであろうキリシタン民衆にとって、生前にパウチズモ（洗礼）という秘跡の儀式を授かっていることは、神デウスの前での自己正当化であり、現世における魂の救済（現世利益）を得ていることでもあった。また、パウチズモを受けているキリシタンのアニマ（靈魂）はパライソ（天国）に行くことが保障されているという確たる安心観は、寛大なデウスの慈悲によって天国入りの切符を手に行っているという「来世における救済」の確信となっていたとも考えられる。『天地』において語られる「現世における安寧」と「来世におけるアニマの救済の保障」は、潜伏キリシタンにとって、厳しい弾圧を乗り越える力となりえた。洗礼（パウチズモ）によって救われるという教えは、彼らの「希望」となっていたのである。

地上でイエスに洗礼を授けた三ジュアンは、外海においては重要な役割を持った人物（聖人）、「サンジュアン様」と呼ばれて崇拝された³⁷。洗礼の秘跡は、潜伏時のキリシタンの間での「お授け」の儀式として継承された³⁸。潜伏キリシタンの信仰生活を支えたのは、帳方（バスチャン歴を伝承し、年間の祝日や宗教行事を伝える役目）、お水方（洗礼を授ける役目）、取次役（妨げになる日を触れまわる役目）の「三方」であった³⁹。「お授け」を授ける役目を担った「お水方」によるバプテスマの儀式は、キリシタンにとって最も重要な儀式として今日まで生活共同体の中で実践、継承され、育まれた⁴⁰。

3.1 -2 救済の経験（宗教経験）

潜伏時代のキリシタン民衆は、殉教したバスチャンが伝えた四つの預言を、後代に伝え

続けた。その内の一つが、「コンヘソーロ（聴罪司祭）が大きな黒船に乗って来ると、毎週でも告白をすることができる。」というものであった。この預言は、潜伏キリシタンの信仰を支える大きな糧となっていた。黒船の来航、そして待ちに待ったバードレ（宣教師）の姿を目にした時のキリシタン民衆の喜びは、はかり知れないものであったと想像される。

キリシタンの信仰共同体にとっての「救済の経験」とは、先祖から語り継がれた預言や『天地』の内容が、この現実世界において自分達の身近な経験として表出されることであった。貧しさゆえに子どもを殺さなくてはいけなかった親の呵責と子どもの苦しみを、『天地』ではキリストが担ってくれたと物語る。また、キリストを裏切って引き渡した十だつ（ユダ）の裏切りについては、キリストは裏切った十だつに対して「自殺さえしなければ助けたのに。残念なことだ」と言ったと物語られる（題目の⑧）。潜伏キリシタン自身は、十だつと自分たちを重ねていたのであろう。彼らもまた洗礼を受けたにもかかわらず、表向きは仏教徒の檀家として生きのびている。潜伏キリシタン民衆は裏切ることによってしか生きられない自分たちでも、自殺さえしなければ赦してもらえる、救われるとの期待を胸に、神デウスを信じつつ、神デウスに希望を託すことができたのである。この信仰の上に「自殺」さえしなければ死後のアニマ（靈魂）は救済されると理解されて、自殺がタブー（禁忌）であると伝承された。

信仰について、ドイツの神学者パネンベルク（1928-）は次のように述べている。

聖書の神によって、人間生活の負い目と責任を、以前には知らなかった深みにおいて経験できるようになるということは、当然のことながら、次のようなしるしの一つである。つまりそれは、この神によって人間の生活現実が包括的に解明され、…そこにおいてキリストの啓示の真理が実証される、という記しの一つである。…大切なのは、わたしたちの現実全体が、イエスの運命と彼のうちに啓示された神によって、その他の方法では到達しえない広がりや深みにおいて開示され、そして経験されるようになることである⁴¹。

キリシタン信仰共同体の中では、悔い改めや励まし合いが、お互いの傷をなめ合うようにして行われていたように想像される。したがって、彼らの宗教経験とは、信仰共同体の中で神デウスの慈悲をひたすら請い願い、いつかは赦されるという希望を紡いでいくという経験であり、これが次第に構造化され、実生化されていったと言えるであろう。

3.2 長崎の潜伏キリシタンと民衆文化

古野清人氏は、潜伏期のキリシタンが形成した独特の信仰形態を「キリシタニズム」と呼んだ。氏は、キリシタニズムの中に宗教混迷（シンクレティズム）的要素を見て、否定的である。また、一般的に見ても、キリシタンに対する評価は低く、「民間信仰」の枠組

みからも外れた、極めて特殊な信仰集団として位置づけられてきた⁴²。

特に、カトリックの立場からの理解では、過酷な弾圧に信仰を持って立ち向かい殉教していった人びとが「正統」な信仰者と位置されるのであれば、信仰を棄てた者は「背教者」として蔑まれることになる。しかし、日本の潜伏キリシタンはその「中間」の立場にある集団として位置付けられるのではないのか。彼らは信仰を「隠して」「隠れて」苦しみつつ「生きる」という道を選択した集団である⁴³。この「隠して」「隠れて」生きる道を選択した潜伏キリシタンの信仰に、筆者はキリスト教が日本に実生化した姿を見出していた。シンクレティズムは民衆の信仰と文化形成の視点からみれば、否定的ではなく、肯定的にみるべきものだ、と筆者は考えている。ちなみに言えば、たとえば古橋氏はフィリピンのキリスト教組織神学者ホセ・デ・メサの神学的解釈学を紹介しつつ、キリスト教を独自の文化において解釈する必要があると強く論じている。

デ・メサは神学とは決して「ふるさと」からかけ離れたものではなく、実はわたしたちの日々の経験、生活、習慣といった文化的アナロジーによって捉えなおすことのできる解釈の方法でありうると訴える。むしろ私たちの言い回しが私たちの内側から、文化の内部者の観点と表現をもって捉えなおされたとき、それはある意味で本物となり、自らとの間に距離をおかない私たちのキリスト教となり、神学となりうる⁴⁴。

外海の潜伏キリシタンは、自分たちの宗教活動とその実践を、間違っても異端的であるとは考えなかったであろう。彼らを異端として評価するのは常に外部からの研究者である。研究者の評価は、西洋キリスト教の教義を中心とした、宣教する側からの視点に立つ。メサの指摘する「内側から文化の内部者の観点と表現をもって捉えなおした」潜伏キリシタンの信仰は、異端どころか、立派な「民衆の神学」とであると評価してもよいのではないのか⁴⁵。

『天地始之事』に書かれた父デウス、母なるマリア、そしてイエスの救済の物語は、キリシタン民衆の郷土(ふるさと)の中で、信仰共同体の身近な経験として語り継がれていた。それを証明するかのように2009年、長崎県多良町垣内地区で、彼らが450年間守り続けた先祖の墓が発見された。「潜伏キリシタン墓碑群」として発表された62基の墓が、荒らされることなく現存したことで世間は注目した⁴⁶。62基の長方形の墓石は、火葬されずに土葬されたことを意味する。『天地』では、「デウスが量りなき御力で、人の魂を元の身体と合一し復活させて下さる」(題目の⑭)と伝えた。キリシタンの死者がそのままの姿で天国において復活できるようにと火葬が禁じられていたこと、その伝承が忠実に守られていたことが、目の前の現実としてあらわれた。今日も人々は、先祖への感謝と敬意を表して墓の前で手を合わせて水を供え、線香をあげている。これを途切れることのない

信仰の継承の形、つまりキリシタンの信仰が民衆文化として大切に伝えられている証拠として、大いに評価すべきであると筆者は考える。

おわりに

「思想は風土に受肉されてはじめて真に思想の名に価する⁴⁷」と谷川氏はいう。氏の言葉は、「実生化」の真髄を捉えている。『天地』は、キリスト教が日本の大地に実生化される過程において、内発的に語り伝えられた記録として、また、彼らの生活に浸透した信仰と希望の物語（民衆の神学）として思想的に大きな意義を持つ。

『天地始之事』を信仰の物語として保持していた潜伏キリシタン民衆は、信仰と生活の共同体を育み、自分達が生きている外海の大地を「地上のエデン」、つまり神から与えられた世界と理解し、常に神の愛が自分達に注がれているという確信を持って生き抜いた。信じる者の根底には、その物語に対するコミットメントが存在する。弾圧時代を生きのびて育まれたマイノリティーとしての潜伏キリシタン民衆の共同体は、『天地始之事』に記された救済の物語が自分たちにとって説得力をもち、正当性を備え、キリシタンという組織の一員であることに意義を見出していたからこそこれを継承したのであろう。またキリシタン弾圧の時代であったからこそ、潜伏を余儀なくされたキリシタン民衆は、相互依存、相互扶助の強力な関係を形成し、自発的結社へと変換した。そして、先祖の伝える『天地』によって、現世から来世に続く救いの希望をキリシタンの子孫へと伝承したのであろう。

『天地始之事』を巡る神学の主題、すなわち潜伏キリシタン民衆にとっての神とは、「在りて在ります」神デウス、創造神であり、彼らの間に啓示され、信仰された「一なる神」であった。この信仰の確信において伝承された『天地』の立場を正しく理解するために、この研究では、特に救いに関わる中心問題を神学的に考察し論述した。

キリスト教の救いの教義に関わる「正統性」は、唯一神への信仰、神の啓示と救済を真理として信仰する立場であるとされるが、キリシタンによって語り紡がれ、『天地始之事』に書き留められた神デウスの天地創造、先祖に与えられた外海の大地、母丸やと御子の誕生、救世主としての受肉、救い主の受難、復活、救済、オラシヨ（祈り）によって支えられたコンフラリア（宗教共同体）の形成等を綿密に考察すると、これらはすべてキリスト教の正統性を見事に守り、堅持し、継承しているものと判断されうる。『天地始之事』を、自分達に与えられた大地を舞台とする自らの救いの物語であると捉えたキリシタン民衆の確信は、自らの揺るぎない信仰と、さらには神と信仰共同体の堅い絆のこともも伝えている。『天地』はまさにキリシタン民衆が命をかけて伝承した信仰の物語であり、それは、日本の大地に実生化された一つの「民衆の神学」の形として確認することができる。

以上の考察によって、『天地始之事』がキリシタンの信仰の物語であり、神探求の書でも

あることから、キリシタン神学の可能性をここに十分に認めることができると筆者は判断している。

余談

残念なことながら、もはやカクレキリシタンの間に『天地』は継承されていない。この聖書物語も現代においてカクレキリシタンの間に再生されることなく、また潜伏キリシタンの宗教心(霊性)も継承されてはいない。これは現場研究からも確認されている。そこで、筆者は、キリシタンの末裔たちの行方を危惧しつつも、彼らの大いなる遺産を評価し、見守り、これを伝え続けることが一研究者の使命はなかりうか、と考えている。潜伏時代のキリシタンは、現在三つのグループに分かれている。カトリック教会に属する者、先祖代々の教えを細々と守り続ける者、そして自分たちを守ってくれた仏教の信徒として生きる者のグループである。そして彼らは年に一度(11月3日)に枯松神社に集まり、合同礼拝を行い、先祖への祈りを捧げている。

地域に生きる人々の生の経験に適切に即応することが神学的ニーズを果たしたことになるのであれば、現在のカクレキリシタン研究は不毛な試みであるのかもしれない。今ではその内部に、自らの歴史を肯定的に支え、積極的に評価し、発展させていく責任を担った人々に会う機会を得ることがない。したがって、カクレキリシタンの実生化が不毛に終わるかもしれないという危惧は続いている。しかし、潜伏キリシタン(先祖)によって、確かに種は蒔かれたのである。

武田清子は、「真実は本来、普遍的なものである、また人間は普遍主義的な思想にむかって、常に自らを開いていく傾向をもつ」という⁴⁸。その言葉を糧に、日本キリスト教研究の一環としてキリシタン民衆の信仰について更なる考察を深めたいと考えている。

主要参考文献

田北耕也(校注)「天地始之事」『キリシタン書・排耶書』1970年、岩波書店、381-409頁。

参考文献

浅見雅一 『キリシタン時代の偶像崇拜』東京大学出版会 2009年。

稲垣良典 『トマス・アクィナス『神学大全』』講談社 2009年。

大橋幸泰 『潜伏キリシタン』講談社選書 2014年。

小島幸枝 「『天地始之事』について」 計量国語学 37巻 1966年、40-43頁。

——— 「『天地始之事』の語彙周辺」キリシタン文化研究會會報 1969年、72-80頁。

五野井隆史 『キリシタンの文化』吉川弘文堂 2012年。

片岡照子 「天地始之事」白百合女子大学研究紀要 1975年、13-32頁。

- 紙谷威広 『キリシタンの神話的世界』 東京堂出版 1986年。
 ——— 『書評 - 『カクレキリシタンの信仰世界』』 日本民族学会誌 216号 1998年、132-146頁。
 古橋昌尚編 『今日のアジアの教会におけるインカルチュレーション』 教文館 2014年。
 武田清子 『正統と異端の“あいだ”』 東京大学出版会 1976年。
 谷川健一 「わたしの『天地始之事』」 『谷川健一著作集 10』 1986年/1995年三一書房 135-240頁。
 寺石悦章 「『天地始之事』における場所のイメージ」 四日市大学総合政策学部論集 6 2007年、37-47頁。
 東馬場郁夫 「比較宗教論の現代的展開」 天理大学学报 第62巻第2号 2014年。
 丸山孝一 「カトリック土着」 日本放送局出版会 1980年。
 宮崎賢太郎 「キリシタン他界観の変容」 『長崎人文研究』 1995年 創刊号、103-121頁。
 ——— 『カクレキリシタンの信仰世界』 東京大学出版会 1996年。
 ——— 「『天地始之事』にみる潜伏キリシタンの救済観」 『宗教研究』 日本宗教学会 1996年、第70巻 308、73-96頁。
 ——— 『カクレキリシタンの実像』 吉川弘文堂 2014年。
 若桑みどり 『聖母像の到来』 青土社 2008年。
 教皇フランシスコ 『回勅 信仰の光』 カトリック中央協議会 2014年。
 W. パンネンベルク (佐々木勝彦訳) 『信仰と現実』 日本基督教団出版局 1990年。

筆者、長谷川(間瀬) 恵美の現在までにおけるキリシタン研究 (抜粋)

- 「キリスト教の実生化—今を生きるキリシタンに学ぶ—」 『宗教研究』 日本宗教学会 2006年 第79巻 347、123-124頁。
 「日本におけるキリスト教の受容と理解—根獅子キリシタンの場合—」 『教会と宣教』 日本福音ルーテル教会東教区 2007年第12号、64-81頁。
 「宗教と文学—遠藤周作の文学における宗教的視点—」 『金城学院大学キリスト教文化研究所紀要』 2008年第12号、79-100頁。
 「キリスト教の実生化—茨木カクレキリシタンに聴く— (共同研究ノートⅠ)」 『宗教研究』 慶応宗教研究会 2009年第22集 60-68頁。
 「魂の継承—茨木カクレキリシタンに聴く— (共同研究ノートⅡ)」 『宗教研究』 慶応宗教研究会 2010年第23集 28-35頁。
 「遠藤周作の思想〈母なるもの〉再考」 『宗教研究』 日本宗教学会 2010年 第83巻 363、277-278頁。
 「隠れ (Crypto) の信仰・生き方に学ぶ—キリスト教の実生化—」 『遠藤周作研究』 遠藤周作学会 2011年第4号、(1)-(16)頁。
 「キリスト教の実生化—宗教と文化の出会いの一考察—」 『日本の近代化とプロテスタンティズム』 上村敏文・笠谷和比古編、教文館 2013年所収、195-211頁。
 「長崎に伝承される聖書物語『天地始之事』現代語訳 (前編)」 桜美林論考人文研究 2013年第4号、192(1)-204(13)頁。
 「長崎に伝承される聖書物語『天地始之事』現代語訳 (後編)」 桜美林論考人文研究 2014年第5号、193(1)-183(26)頁。

* 本稿は、2014年9月日本宗教学会第73回学術大会、2014年10月天理きりしたんワークショップ (日本学術振興会外国人特別研究員事業) にて発表した原稿に加筆・訂正したものである。

註

- 1 長谷川(間瀬) 2013,2014. 田北耕也(校注)「天地始之事」、『キリシタン書・排耶書』岩波書店、1970年所収：pp.381-409を主要参考文献として現代語試訳した。田北氏は、西彼杵半島東檜山の下村善三郎氏が所持した写本『天地始之事(善本)』を底本としている。
- 2 片岡は次のように『天地始之事』を評している。「天地始之事は、現代人の想像を絶する厳しい弾圧にも屈せず、祖先伝来の信仰を守り続けようとした人たちの間から、教会も指導者もなきままに世々七代を数える潜伏期間に生まれた異色のキリシタン書というべきものである。」片岡 1975：p.13.
- 3 前掲「筆者の現在までにおけるキリシタン研究(抜粋)」を参照いただきたい。
- 4 宮崎 2014：p.14. また、キリシタンの呼称は宮崎氏の表記法(宮崎 1996：第二章)に従事している。キリシタン時代(1549-1644年)：キリシタン、潜伏時代(1644-1873)：潜伏キリシタン、復活時代(1873-現代)復活キリシタン/カクレキリシタン。
- 5 長谷川(間瀬) 2011、一部修正。
- 6 288年に殉教したローマの軍人セバスチャンを霊名とする日本人伝道士のことであるが、「佐賀鍋島藩深堀領平山郷布巻に生まれ、深堀の菩提寺の門番であったとされる。」五野井 2012：p.262-参照。日本名はわかっていない。紙谷 1986：pp.177-190.
- 7 その一人はトマス次兵衛(1600?-1637)神父である。幕府は彼を捜すため、大村藩・鍋島藩・島原藩・平戸藩を遣わし、西彼杵半島の山狩りが35日間行われた。しかし見つけることは出来なかった。次兵衛神父が身を隠していた洞窟は現在「次兵岩」として聖地となっている。
- 8 長谷川(間瀬) 2013：p.200(5)。写真 大天使ミカエルと槍で突かれた悪魔。
- 9 長谷川(間瀬) 2014：p.193(2)。写真 出津のキリシタンが先祖代々宝物として保存した十五玄義図の絵。
- 10 嶋崎賢児氏(1935年生一、京都在住カメラマン)：潜伏キリシタン嶋崎弥吉の5代目の子孫。弥吉は長崎外海でプチジャン神父によってカトリックに復帰した。貴重な写真(注8)(注9)を提供して下さった。野中騒動についても詳細を語って下さった。
山崎政行氏(1929年生一、外海観光ボランティアガイド協会会長)：嶋崎氏と同じく、外海の潜伏キリシタンの子孫である。2010年9月、学会開催前後の二日間の動向を共にして下さい。山崎氏は、「外海の歴史・文化は目で見て楽しむものではない、心の安らぎを求めて歩け」とご教授下さった。また、「隠れは‘復活’したことに意味があるとすけん、復活できなかつたらそのまま消滅していくんじゃない。」と、心の内をも話して下さい。心から感謝したい。
- 11 田北 1970：pp.381-409。「天地」には9つの異本が発見されている。小島 1969：p.72-73.
- 12 「異端」とは、「正統」と同じ啓示、教義、信条に立ちながら、その解釈において、正統に対する批判を表明し、正統と異なる考えを主張するものである。異端は正統に対する異端であって、異教ではない。武田 1976：p.81。
片岡照子は、『天地始之事』を「もはやキリスト教とは言えないほど変質してしまった」と評する。片岡 1975：p.14. また、寺石悦章は、「『天地始之事』をカトリックの「正統な」教えを引き継いだものとみなすことは、到底できない。」と断じている。寺石 2007：p.37.
- 13 潜伏が伝承した地名には、ベレン(ベツレヘム)、ルソン(フィリピン)、ツルコ(トルコ)、メシコ(メキシコ)、フランコ(フランス)、ロウマ(ローマ)等々、外国の地名が語り継がれている。この場所のイメージを研究した論文、寺石 2007年が参考になる。
- 14 紙谷は全体を三段の構成(①～②、③～⑩、⑪～⑭)としている。紙谷 1986：p.200.
- 15 小島 1969：p.78. 宮崎氏は「『天地』は浦上の潜伏キリシタンの指導者たる帳方を中心に、外海の信徒の五島移住を契機として、十八世紀末にまとめあげられた、唯一の潜伏キリシタン自身の手になるキリシタン教義書」と評している。宮崎 1996：p.79.
- 16 田北 1970：p.632.

- 17 ルシフェル（悪魔）は「天狗」とも訳された。当時の宣教師が仏教（特に密教の山伏や修験者）に敵対感情をもち、デウスに敵対する悪魔として「天狗」と翻訳されたと考えられる。紙谷 1986 : p.51-
- 18 紙谷 1986 : p.44-45. 宮崎 1996 : p.80-81.
- 19 使徒信条：われは天地の創り主、全能の父なる神を信ず。われはそのひとり子、われらの主イエス・キリストを信ず。主は聖霊によりて宿り、おとめマリアから生まれ、ポンティオ・ピラトのもとで苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府（よみ）に下り、三日目に死人のうちから復活し、天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり。かしこり来たりたまいて、生ける人と死にたる人とを裁きたまわん。われは聖霊を信ず。また聖なるキリスト教会、聖徒の交わり、罪のゆるし、からだの甦り、限りなきいのちを信ず。アーメン
- 20 宮崎 1995 : p.109. 氏は、『天地』において「カトリックの基本的他界観であるパライソープルガトゥリヨーインフェルノという垂直他界観は潜伏時代においても正しく伝承されている」と論じている。
- 21 『聖書』の創世記では、神との約束を破って禁断の木の実を食べようエヴァにそそのかす悪者として「蛇」が登場する。しかし、『天地』における悪者はルシフェル（天狗）である。「蛇」は神道においては「神の化身」とされる尊い化身であるため、悪者として登場しないと私は考えている。
- 22 「人の子が来たのが… 多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためである」マタイ 20 : 25, マルコ 10 : 45. キリストの代価は神に支払われたとアンセルムス (1033-1109) は説く（満足説）。
- 23 「御子のうちにあつて、私たちは、贖い、すなわち罪の赦しを得ています」コロサイ人への手紙 1 章 14 節。
- 24 稲垣 2009 : p68.
- 25 三度目の外海訪問の際、山崎政行氏は、崖から子どもを落としていたとされる場所に案内してくださった（2010 年 9 月）。
- 26 宮崎氏は「潜伏キリシタンたちは、罪なくして死んだ者のために、みずからの子を犠牲にしても救ってくれる寛大な神の姿をもとめたのである」と解釈している。宮崎 1996 : p.88.
- 27 摂理とは、神が永遠の御計画に従って天地を創造し、その世界を支配し、目的に向かって導かれるという信仰による教理。
- 28 ローマにおいては、352 年に教皇リベリウスが真夏に聖母のお告げを夢で受ける。その夢のお告げの通りに雪が降ったところに教会を建設したのがサンタ・マリア・マッジョーレ大聖堂。教会は「雪の聖母マリア大聖堂」と称され、夢のお告げが下った 8 月 5 日は祝日とされている。
- 29 テオトコス論争はカトリック教会全体の問題として 4 世紀頃から議論された。コンスタンティノポリスのネストリウスがマリアを「キリストを生んだ者」と呼んだ際、アレキサンドリアのキュリオスが反論を唱え「神の母」であることを主張した。この論争は 431、433 年のエベソス公会議、451 年のカルケドン公会議においてイエス・キリストは「我々の救いのために、神の母、処女マリアから生まれた」と定義されて結論に至る。
- 30 長谷川（間瀬）2013、『日本の近代化とプロテスタンティズム』所収論文。
- 31 紙谷 1986 : p.27.
- 32 コンフラリアとは潜伏時代に入る前に宣教師の指導によって組織された一般信徒による宗教組織。
- 33 大橋 2014、第五章参照。大橋は、キリシタン信徒が生業の従事者であり、村社会の一員でもあり、さらに他の複数の属性を併せ持つて潜伏活動をしていたことに着目する。
- 34 小島 1966 : p.42.
- 35 16 世紀のトリエント公会議において七つの秘跡が擁護され、トマス・アクィナスの『神学大全』において秘跡論が成立された。プロテスタント教会における秘跡は洗礼と聖餐のみである。

- 36 『歎異抄』第3章一部、「善人なほもて往生をとぐ、いはんや悪人をや。しかるを世の人常に曰く、「悪人なほ往生す、いかにいはんや善人をや」。
- 37 キリシタンの特徴として、聖人崇拜、聖像崇拜、聖遺物（信心具）崇拜が認められる。偶像崇拜は西洋のキリスト教会では決して許されないが、イエズス会の日本布教活動においては推進された。その一つが「聖母の像」である（浅見 2009 年、若桑 2008 年参照）。キリシタンは聖遺物（聖骨箱、聖職者の骨や衣服、メダイ等）を、幕府の手入れを受けた際には筒の中に入れて藁屋根の中に隠し守り続けた。
- 38 紙谷 1986 : pp.168-175.
- 39 主要なのは帳方と水方。
- 40 今日のカクレキリシタンの「お水方」の話し、その詳細については長谷川（間瀬）2007 年をご参照いただきたい。
- 41 パネンベルク 1990 : p116.
- 42 紙谷 1998 : p.134.
- 43 長谷川（間瀬）2011.
- 44 古橋 2014 : p102.
- 45 教皇フランシスコの回勅 2014 : 36 「…神学は信仰の歩みそのものの一部です。信仰は、キリストの神秘の内に頂点に達する神の自己啓示をより深く理解しようと努めるからです。」
- 46 2012 年 1 月 20 日 朝日新聞 長崎地域版。
- 47 谷川 1986/1995 : p.135.
- 48 武田 1976 : p.72.